六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

宮田裕章　データサイエンティスト

Hiroaki Miyata / Data Scientist

CREATOR INTERVIEW No 152

宮田裕章　Hiroaki Miyata

データサイエンスなどの科学を駆使して社会変革に挑戦し、現実をより良くするための貢献を軸に研究活動を行う。専門医制度と連携し5,000の病院が参加する National Clinical Database、LINE と厚労省の新型コロナ全国調査など、医学領域以外も含む様々な実践に取り組む。それと同時に、世界経済フォーラムなどの様々なステークホルダーと連携して、新しい社会ビジョンを描く。宮田が共創する社会ビジョンの1つは、いのちを響き合わせて多様な社会を創り、その世界を共に体験する中で一人ひとりが輝くという“共鳴する社会”である。

NO 152

宮田裕章 データサイエンティスト

HIROAKI MIYATA / Data Scientist

クリエイターインタビュー

「現代版お茶会で環境と人が響き合う体験を」

新しい都市型の文化を、
ともにつくりあげる。

published_2023.11.15 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

慶應義塾大学医学部教授を務め、データサイエンスを軸とした科学的方法論を専門としながら、「大阪・関西万博」テーマ事業プロデューサーや飛騨に設立予定の「Co-Innovation University（仮称）」の学長候補として立ち上げを行うなど、幅広い分野で活躍する宮田裕章さん。近年「ウェル・ビーイング（well-being）」が注目されていますが、宮田さんは「コー・ビーイング（co-being）」というテーマを掲げ、学問からアートまでを横断しながら「ともに生きる」ための未来ビジョンの共創を行なっています。今回は、データサイエンスや AI 技術などのテクノロジーと社会の関係、未来におけるクリエイティビティ、そして都市と文化、人々がより良い形で変化していくためには何が必要か、など宮田さんの未来を見据えた展望を伺います。

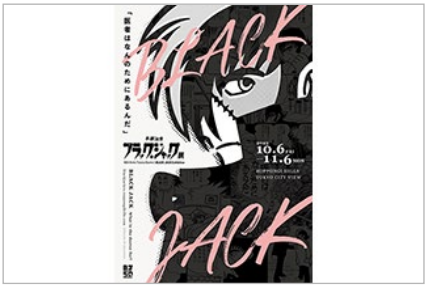
多様な目的を可視化するデータの力。

私が一番力を入れていることは、過去も現在も変わりません。それは科学者の立場から、よりよい世界の実現に貢献すること。データサイエンティストという肩書きがわかりやすいので、現在はそう名乗っていますが、ある特定の分野の専門家として“のみ”何かをすることにこだわっているわけではありません。社会全体が領域を超えて変化していく中で、データやデジタルを軸にしつつ、未来をつくることに関与していきたいと思っているんです。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

産業革命以降、お金より大事なことがあると言いつつも、お金で世界が回り、都市は経済合理性の中で労働力を効率よく利用する装置という側面が強くなっていきました。そうして大量生産・大量消費のスタイルが定着し、街の姿はグローバル化によって没個性化していきました。そういった状況下で、私が関わるデータサイエンスは、経済だけではない多様な価値を可視化することが重要な要素であると言えます。もちろん経済は未来へ向かっていくうえで重要な手段ではあるのですが、目的ではないんですね。例えば、環境との共存だったり、人権だったり、あるいは文化だったり、多元的な価値を可視化して、よりよい形でコミュニティ間をつなぐ役割が、データに期待されていると思います。

医療分野では、数十年前からお金よりも命の価値が尊ばれてきました。「ブラック・ジャック展」で、（手塚治虫さんのご子息の）手塚眞さんと対談する機会があったのですが、印象的だったのが「ブラック・ジャックは医療漫画というより、いのちを巡る物語だ」という言葉。命と向き合う覚悟への問いを突きつける象徴的な存在として、ストーリー中にはお金がたびたび登場しますが、間違いなく中心にあるのは命であり、お金は単なる手段なんです。それが医療では共通認識になっていました。そういった価値観は、今では環境や労働という領域でも重要な共通認識になっています。



手塚治虫　ブラック・ジャック展

連載50周年を記念し、六本木ヒルズ東京シティビューにて開催。天才外科医ブラック・ジャックを主人公とする名作医療漫画の誕生秘話、手塚作品に通底するヒューマニズムなどを紹介する。宮田さんは、展覧会トークイベントの公式ファシリテーターを務めた。期間は2023年10月6日（金）から11月6日（月）まで。現在は閉幕。

©Tezuka Productions

もともと企業はある社会的目的を達成するための集団でしたが、とくにここ 2、30 年は、短期利益を重視する株主至上主義が世界を席巻していました。映画『ウォール街』での “Greed is good” というセリフが象徴的です。お金を稼ぐことが正しい、そういう価値観に囚われてしまったわけです。でもやはりそれは手段であって、目的はそれによって何を実現するかです。未来につながる多様な共有価値の先駆けとして、現在認識されているものが SDGs ですね。環境や健康への負荷を可視化することによって、例えばファッションでは、この服はどこからきたのか、途上国を搾取しているんじゃないか、という問いにつながり、廃棄を前提につくっていてはいけないという認識に移行しています。その結果、どういった未来を目指すか、ということがビジネスで非常に重視されてきています。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

データを用いて多様性を尊重できるコミュニティへ。

データのもうひとつの大きな役割は、個別化です。これまでは「みんな」という平均値を想定したモノやサービスがつくられてきたのですが、デジタルの普及によって、もっと個別化された体験を提供できるようになってきました。個別化するコストもこれまでは非常に高かったのですが、低く抑えられるようになってきています。例えば医療であれば、ある種の遺伝子型の人には抗がん剤が効かないことがわかってきた。それならば、個々人に最適化された療法を提供しましょう、といったことです。

また、現在の日本社会は特に平均的な人に合わせてつくられてきた側面が大きいです。これは国民皆保険制度の充実や、健康寿命の長さなど、いわゆる「最大多数の最大幸福」という意味ではいい国なんですね。ただ、平均からこぼれ落ちると一気にリスクを背負うという面もある。

象徴的なのは、シングルペアレンツの貧困率が直近の OECD 調査でデータのある 36 カ国中ワーストだということ。経済格差の大きいアメリカを抜いて、日本の方が深刻なんです。女性の場合、離婚したあとは法的にも倫理的にも、子どもの扶養義務が母親のイシューとされる。経済的な能力に関係なくです。先日ノーベル経済学賞を受賞したクローディア・ゴールディン氏が「日本は女性に仕事を提供しただけで、実際の問題は改善していない」とおっしゃっていましたが、その通り働く女性のかなりの割合がパートタイムなんですね。

そんな状況で例えば病気になったら、生活を成り立たせることが非常に困難になります。そういった苦しみに対して行政が提供するサービスは、これまでは個別の要因に個別に対応する足し算型のものしかなかった。これからはデータを用いることによって複数の要因をカバーし複合的に対応する掛け算型のアプローチで苦しみに寄り添う仕組みをつくれる可能性がある。また、多くのサービスは状況が切羽詰まってから始まりますが、もっと前の段階でうまく手を差し伸べられれば、問題自体を未然に防げるかもしれない。例えば子どもの検診段階で、同年齢の子たちと比べて一定以上の数値差が生じているケースを細やかにフォローしていけば、隠れた貧困や虐待に気付けるかもしれない。これまで最大多数の最大幸福しか実現できなかった社会から、多様な人に寄り添い、誰も取り残すことのない社会を実現するために、データや AI 技術が活用できるんです。これを私は「最大多様の最大幸福」と呼んでいます。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

published_2023.11.15 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

持続可能性とウェルビーングの調和の中で未来を考える。

都市に目を向けると、パリやバルセロナでは観光経済を優先しすぎたためにオーバーツーリーズムが生まれ、地元コミュニティの破壊が日本よりも早い段階で起こりました。その一方で新たな取り組みも生まれていて、例えばバルセロナでは、区画ごとに共有地を設けてコミュニティの交流の場とすることで、住む人たちの誇り（シビックプライド）を醸成しています。また有名な事例ですが、コペンハーゲンでは、持続可能性を指標として、街づくりが行われています。コミュニティが何を選ぶかということが、その街の特徴になっていくんですよね。都市が多様な価値観をはらみながら、未来にどうつなげていくかという世界各国のチャレンジは非常に興味深いですね。

私が携わっている大阪・関西万博のパビリオンや飛騨の Co-Innovation University のキーコンセプトは、「Better Co-Being」。この背景には、持続可能性とウェルビーングの調和の中で未来を共創する、という思いがあります。今を生きる人がひたすら苦しい思いをすること、あるいは童話のキリギリスのように刹那を謳歌して未来が潰えてしまうこと、どちらも望ましくないですよね。しかし、多様な人々が豊かに生きようとすると、短いスパンではどうしても折り合いがつかない。大阪・関西万博のミーティングでグローバルサウスの方々とも話すのですが、先進国が発展したあとで、一方的に Co2 排出を規制するのはどうかと思う、と。それはまさにそうで、現在の環境破壊に対する責任が先進国にはある。そのうえで多様な人々の豊かさと地球の持続可能性を調和させ、未来を見据えなければなりません。響き合う未来を見つめながら、ともに生きることを、「Better Co-Being」と呼んでいます。現在だけではなく、未来がどうあるべきかをともに考える必要があるのです。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

大阪・関西万博シグネチャーパビリオン「Co-being」

テーマ事業「シグネチャープロジェクト（いのちの輝きプロジェクト）」のプロデューサーである宮田さんが主導するパビリオン。万博会場中央にある「静けさの森」の中で、人類がデータを分かち合い共創する未来社会を表現。建築デザインに SANAA、キュレーターに長谷川祐子氏が参加。

COPYRIGHT© HIROAKI MIYATA, All RIghts Reserved

Co-Innovation University（仮称）

岐阜県飛騨市を本拠地に開学を予定している私立大学。宮田さんは学長候補として就任。「いま、文明に問う。」をコンセプトに、全国各地の学びの拠点から“未来を創る人材”を育成する。

未来へ向けて変化するアートの役割。

ここ最近、Chat GPT をはじめとした生成 AI の進化により、知識習得を競う受験勉強のあり方は役割を終えつつあります。これから必要になってくるのは、「問いを立てる力」。それをどう磨くかと言えば、ずばり問いを立て続けるしかないんですよ（笑）。そこで私が携わっている飛騨の Co-Innovation University では、各地域に関わる企業や行政と連携しながら、実践を通じて多様な人々と協力しながら問いを立てていくプログラムを構想しています。飛騨で言えば、林業を軸にしたもの、富山ではウェルビーイングを軸にしたもの、などです。アートや観光を軸にしたコミュニティについても構想はありますね。

余談になりますが、先日、Co-Innovation University を設計している建築家の藤本壮介さんと長野県の小布施へ行ってきました。小布施は葛飾北斎が人生の最後に多くの時間を過ごした土地です。彼はおもに肉筆画を描きながらここで晩年を過ごしました。浮世絵「富嶽三十六景」シリーズで有名な北斎ですが、日本ではそれ以降の画業が注目されることは少なく、肉筆画の多くは海外に散らばっています。しかし小布施には、「鳳凰図」や「男浪図」、「女浪図」といった優れた作品が残っている。香川県・直島の地中美術館には、モネが見た最晩年の光を追体験できるような空間とアートが共鳴した、安藤忠雄さん設計の素晴らしい空間があります。いつか同じように、北斎が追求したものを丸ごと体験できるような空間を小布施につくり、これらの作品を展示できないかと考えています。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

宮田裕章 データサイエンティスト

HIROAKI MIYATA / Architect

published_2023.11.15 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

世界と“私”を結ぶクリエイティビティ。

コンテンポラリーアートがどこからはじまったかと言えばいろいろな見方がありますが、デュシャンがモナリザに髭を描いたという行為が象徴的だと思います。近代が積み上げてきた価値観を打ち壊したり、批判的に捉えたりすることで、いろいろな言説が刻まれ、それは重要な創造性の役割だと思います。一方で時代が大きな転換点を迎えるような今日においては、従来の価値観への批判的解釈に加え、新しい視点をどう未来につなげていくかということもまた、アートやクリエイティブの重要な役割なのではないかと思います。

既存の価値観を批判して社会の見方を変えていくのもクリエイティビティですし、未来への問いを立て、われわれが一歩を踏み出す勇気を与えてくれるのもクリエイティビティだと思います。知識を蓄積し、引き出す能力は、検索やクラウドによって置換されてきました。さらに、知識を整理して課題を抽出する作業も、やがて生成 AI が精度高く行うようになっていくでしょう。そのときに人間がやるべきことは、新しい問いを立てていくこと。クリエイティビティが学ぶこと、働くこと、生きることにおいて、世界と私たちを結ぶ重要な概念になっていくでしょう。

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

文化創造の空間を街全体に広げてみる。

クリエイティビティの力で、新しい都市の未来をともに結んでいくコミュニティが生まれると面白いかもしれません。今、虎ノ門ヒルズにある「TOKYO NODE」での展覧会のプロジェクトに取り組んでいるのですが、その場所はある種の没入型の空間を目指しており、この没入型、イマーシブという概念は、都市やコミュニティにおいてより重要なものになっていくと思っています。ひとつの到達点だと感じたのはニューヨークでの体験型ショー「Sleep No More」でした。ブロードウェイを軸とした演劇文化の中でこの作品がニューヨークで生まれ、それを体験するコミュニティが成立しているのは重要な背景だと思います。最近では目[me]のみなさんがディレクションした、「さいたま国際芸術祭 2023」のメイン会場も素晴らしかったです。見る側と見られる側を観客が行き来し、感覚を拡張しながら、日常の物の見方を変える展示。また地域の古い建物を舞台に多様な人々が参加して、作為と無作為の境界を巡る体験は、アートとイマーシブ体験の新しい可能性を示したと思います。

そういった新しい兆候を考えると、東京、そして六本木の可能性に思いをはせずにはいられません。東京には大都市ならではの課題もありますが、多様なコミュニティを内包する可能性の塊でもあります。そのとき東京で生まれていくのは、ニューヨークや上海、パリとは異なるコミュニティになると思います。例えば重要な特徴のひとつとしては、食文化があります。世界から日本へやってきた人が何を楽しみにしているかと言えば、近年一番に挙がるのが食です。イマーシブなアート空間と食を掛け合わせるのは、まあ安直かもしれませんが、一案ですよね。そうした様々なコミュニティが生み出す価値を重ね合わせながら都市の未来を共に結んでいくことが、新しい文化や社会につながっていくものになると思います。

Sleep No More

2011年初演、シェイクスピアの戯曲「マクベス」を下敷きとした体験型のショー。全7階の建物「マッキトリックホテル」を舞台に、観客は自由に移動しながら鑑賞することができる。各スポットで同時に演じられる物語を見る順番は観客に委ねられており、「没入型劇場（イマーシブシアター）」の所以となっている。

©Robin Roemer

TOKYO NODE

虎ノ門ヒルズ ステーションタワー45階〜49階に位置するアートやサイエンス、エンターテインメントなどの領域を超えて様々な要素をつなぐ情報発信拠点。建築デザインは、重松象平氏、ロゴは中村勇吾氏が担当。メインホールと3つのギャラリーを持ち、2023年10月6日（金）に開業。こけら落とし公演として、没入型パフォーマンス『“Syn：身体感覚の新たな地平” by Rhizomatiks × ELEVENPLAY』が開催された。

©DBOX for Mori Building Co., Ltd.

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

published_2023.11.15 / photo_yoshikuni nakagawa / text_ikuko hyodo

TOKYO NODE で計画している展覧会『蜷川実花展 Eternity in a Moment 瞬きの中の永遠』では、蜷川実花さんらとクリエイティブチームを組んで没入型の空間をつくる予定です。コンセプトは「桃源郷」。似た言葉であるユートピアは理想的なものに物理的な形態を与え、ともすれば破綻してディストピアになっていくわけですが、桃源郷は心の中に見出すものです。今回の空間で展示するのは、美しくも身近にある風景を重ねた体験です。それは、誰も見たことがない特別な秘境の景色ではなくて、ごく身近にある景色。ちょっと視点を変えたり、時間帯が変わるだけで劇的に景色が変わっていきます。そうしたある瞬間に訪れる一回性の体験の中に、普遍的な感情を重ねました。例えば、雨の日の水たまりに映り込んだネオンの光ってすごく美しいんですよね。そういった経験から得られる感情を重ねていくことで、心が変わる。そうすると世界の見え方が変わる。そんな体験を目指した空間です。これらは都市とアートをめぐるひとつの問いとしても捉えています。

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

蜷川実花展 Eternity in a Moment 瞬きの中の永遠

クリエイティブチームEiMが送る圧倒的スケールの空間体験型展覧会。「瞬きの中の永遠」をテーマに、物語性を感じられる美しい作品群が並ぶ。EiMのチームのメンバーには、宮田さんをはじめ、セットデザイナーのEnzo氏らが参加。虎ノ門ヒルズ　ステーションタワーTOKYO NODE　GALLERYにて、2023年12月5日（火）から2024年2月25日（日）まで開催。
特設サイト：https://tokyonode.jp/sp/eim/©DBOX for Mori Building Co., Ltd.

それぞれの都市には独自の文化があります。六本木ヒルズが高層階に美術館をつくり、アートというフィールドで新しい街と文化をつくっていったように、次のフェーズではさらに多様な文化が都市という空間でつながり、新しいものを生み出しつづける場ができたら面白い。先述した虎ノ門ヒルズだけでなく、麻布台ヒルズや高輪ゲートウェイなど東京の再開発が新しいコミュニティを生むことができれば、より良い未来につながると思います。イマーシブの例を先ほど挙げましたが、多様なコミュニティの価値が共鳴して街全体に広がって、街中のお店やレストランに行っても一貫したつながりが感じられると面白いかもしれません。お祭というものが日本でもそうしたつながりをつくってきました。デジタル技術を活用することができる現代では、作為的なものだけでなく、無作為の自然発生的なイベントも巻き込みながら、文化をつくっていくことも興味深いと思います。

麻布台ヒルズ

六本木ヒルズ、虎ノ門ヒルズに続き、森ビルが「Modern Urban Village」をコンセプトに開発を進める再開発プロジェクト。2023年11月24日より順次開業。高さ330メートルの森JPタワーは、国内でもっとも高いビルとなる。広大な面積を生かした多様な都市機能を備えるコンパクトシティを目指す。計画には、故シーザー・ペリ氏、トーマス・ヘザウィック氏、藤本壮介氏などが参加。
©DBOX for Mori Building Co., Ltd. - Azabudai Hills

©Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

SANAA とつくっている大阪・関西万博のパビリオンは、「広がりながらつながる空間」という、これまでの建築とは真逆のあり方を目指してつくっています。建築には、一般的に公と私を分け、外部から守るという機能がある。一方でルーヴル美術館や金沢 21 世紀美術館といった場所は、まさに地域全体へと作用を及ぼしています。そんなあり方を追求していったところ、壁も屋根もない建築になってしまいました（笑）。その場で何ができるかを議論しているのですが、「侘び茶」に可能性を感じています。利休の侘び茶は、戦国時代に殺し合いをするほど価値観の対立があった中で、人が鎧を脱ぎ捨てただ一人の個として向かい合う形式をつくり出した。現代のお茶会として、その場にいる人たちが周囲の環境とつながり、互いに響き合う体験を実現できたら、そこに未来が感じられるだろうと思います。これはひとつの思考実験に過ぎないですが、体験によって感覚や世界の捉え方が変わり、未来へとつながっていく社会が生まれるといいなと考えています。

撮影場所：開業を間近に控えた麻布台ヒルズ

取材を終えて ……

オープンに向けてまさに建設中の麻布台ヒルズでの撮影にて、トーマス・ヘザウィックの設計による優美な曲線が顔を覗かせている様子に感動されていた宮田さん。インタビューでは、明晰かつ明快な語りで経済の歴史からクリエイティビティの変化までを鮮やかに横断しながら、未来の輪郭を描いていく姿が印象的でした。（text_eisaku sakai）

Ⓒ Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.